

『イエスのミステリー』

バーバラ・スーリング著、高尾利数訳、NHK出版、1993年刊
Barbara Thiering, *Jesus The Man: A New Interpretation From
The Dead Sea Scrolls*, Doubleday, New York (1992)

山本 盾

『聖書考古学評論(略称BAR)』1994年3/4月号の読者欄(QUERIES & COMMENTS)に、2篇の興味深い投稿が掲載された。一つはクリスマスの日付に関する新見解、もう一つは「大切なのはイエスが生まれたという事実であり、それがいつであるかはどうでも良い」(Jesus Was Born, Who Cares When.)と題するものであった。クリスマスに異教の要素があるか否かについてこの欄で展開された論争を締め括るものであったが、後者は近年の聖書の歴史研究に対する戸惑いを如実に示している。

『イエスのミステリー』は、遥かに激しい困惑を我々に与えた。「史的イエス」、つまり現実の歴史上の人物としてのイエスについて解明する事は、不可能に近いと思われて来た。それは、クムランの洞窟から「死海文書」が発見された後も、基本的に変わらなかった。しかし本書は、イエスが、正確に何年何時何分、某地点より何メートルの場所で何をしたか、といった事まで克明に知る事が出来ると主張するのである。しかも、それによればイエスは、クムランから1キロメートルの地点で生まれ、結婚して3人の子供を儲け、70才迄生きたいらしい。

この様に奇抜な、ともすれば胡散臭いと思われがちな著者の推論の根拠は、それ自体驚くべきものである。死海文書の著者達(スーリングは、その中に使徒パウロも含まれると断定している!)は、旧約聖書を、彼らの思想に従って解釈したが、同様に新約聖書も又、表面の物語の下に隠された事実を読み取る事が来ると言うのである。こう書けば、誰もがやって来た比喩的解釈だと思われるかも知れない。しかしこの「解釈技術」(著者はこれを「ベシエル」と呼ぶ)が明らかにするのは、「福音書」や「使徒言行録」の二重構造であって、曖昧な言葉の厳密な使い方を知れば、誰もが同じこの結論、つまり、イエスに関わる諸事件の記録の発見に辿り着くのである。そこには、我々の精神を豊かにする様な教訓も、キリストを信じる者だけが与かるという救済も、もはや見られない。今や読者は、キリスト教会が教え、又、教会の外の社会も疑う事無く受け入れて来た、素朴なイエス像を放棄せざるを得ないのである。

35章に亘る本文は、冒頭陳述の様にイエスの行動を明らかにする。それによればイエスは、母マリアが婚約期間中に身籠もった(処女降誕)為、「ダビデの家系」でありながら王位継承を拒まれ、「洗礼者」と対立。彼は宗団への自由な入会を主張し、低い段階の人にも共餐を受けさせ(水をブドウ酒に変える)、普通の人を聖務者に叙任した

(五千人を養う)ばかりでなく、自ら祭司として振るまい(水上を歩く)、レビ人の權威に挑戦した(中風の者を癒す)。ゼロテ党員の破門を解いた(ラザロを蘇らせる)為に政治犯として処刑されたが、蘇生し、規則に従って隔離生活へと戻った(昇天)。数々の奇跡物語から、現実に生きた1人のユダヤ人の生涯が、正確に描き出せるという訳である。

これらの推論を補強するのが、本書の半分を占める、4部構成の「付録」である。圧巻とも言うべき第1部の「年代学」では、当時エッセネ派によって使われていた6つの異なる暦と、それぞれの歴史的・政治的背景が解説されている。著者は、その思想的な面については詳述せず、専ら暦を取り扱う技術の解説に腐心する。そして、福音書に見られる数々の曖昧な表現に、「ダニエル書」などから掘り起こされた本当の意味(例えば「夕方」は、opse なら午後6時、hespera なら午後9時)を与えた。スィーリングはこれを駆使して新約聖書を読み替え、「年代記」に結実させた。続く第2部「場所」、第3部「ヒエラルキー」では更にそれらを、死海文書解説と遺跡発掘の成果に結び付ける。クムラン宗団が「距離は時間の等価物」であると捉える思考回路を持っていた、という前提で、著者は福音書の中の様々な地名を、死海周辺に同定していく。そしてついには、十字架刑の場所さえも言い当てて見せるのである。

新約聖書の解釈から、超自然的要素と共に神話をも取り除いていく彼女のユニークな視点は、伝統的な主張と真っ向から対立するであろう結論を導き出している。即ち、「ミカエル」「ガブリエル」といった「天使」達や、「聖霊」「悪霊」などは皆実在の人間であり、「天」とは「新しいエルサレム(=クムラン)」の至聖所を指しており、「神」すらも頂点に立つ者(アンナス家の大祭司)の称号に過ぎないとするのである。

本書の破壊的な仮説は、激しい拒否反応を引き起こした。それは著者が述べる「福音書がコントロールなしに、伝承の成長から起こって来る諸物語の沈黙物であるという仮定に基づく現代の批判的方法とは反対のものである」からという理由だけでは説明出来ない。

BAR に掲載された、本書のアメリカ版に対する書評は、こう結論している²⁾。「本当のミステリーは、堅実な学問の本で知られる(出版社の)ハーバー・サンフランシスコが、どうしてこの本の出版を決めたのか、である。」まるで本書は際物だと言わんばかりである。ある読者はこれに対し、「本当のミステリーは、何故 BAR の編集スタッフは、こんな不敬な屑話を掲載しようとしたのか、である。」と応じた。他の意見も殆どが(12篇中10篇)本書への不快感を表明した³⁾。その中には、「死海で魚が捕れるものか」といった様な、趣旨を全く理解していないと思われるものもあったが、この様な嘲笑を招いたのは、一つは、以下の様な見当外れの論評のせいである。

例えば、「スィーリングはこのカップル(イエスとマグダラのマリア)の“個人的な感情”を描写するのを控えている——中略——スィーリングは論証出来る事実固执している様である。」とか、「スィーリングの本は、非常に分厚く見える、という点で人を欺き易い——中略——残りの300ページは、この本に、重たい学問の感触を与える冗長

な付録によって浪費されている。」といった具合である。この子供じみた感想は、「史的イエス」の研究に伴う、思想的な制約の多さから来るのだろうか。

いずれにせよ、本書の中に、相当誤解を招きやすい部分があるのは事実である（勿論我々が約2000年もの間、聖書を「誤解」して来たのも事実であるが）。以下、「あとがき」で指摘され無かった部分を中心に、本書で曖昧にされている箇所を考察してみよう。

1 「ベッセル」の問題。旧約聖書の解釈から生まれた「クロスワード」が存在するのは確かである。しかし、それが果たして「福音書」を書く時に適応されたのだろうか。本書の第4章「ベッセルの技術」を読んだ人の中には、この様な感想を抱く人もあろう。著者の「ベッセル」という言葉の使い方は、あまり吟味されたものでは無い様だ。それはまるでどこかに、聖書を書く為の、あるいは読む為のマニュアルがあるかに聞こえるのだ。読者はそのマニュアルを探そうとして「付録」を開くのだが、そこには、クロスワード・パズルの正解が詳しく（だが全部ではない）載っているだけで、解き方は殆ど示されていないのである。著者自身も、「(ベッセルによって知られる)特別な意味は、多くの違った資料から得られる」と述べ、それが、死海文書を参照すれば誰でも解けるようなものではない事を暗示しており、その方法が「必ずしもつねに論理的というわけではない」と断っているのだが。

BARの書評は、これを「空想的な(fantastical)再解釈」と決め付けた。現在の我々には、本書の様々な結論（例えば「義の教師=洗礼者ヨハネ」「悪しき祭司=イエス」）も、こじつけの集大成としか思えない。しかし、クムランという特異な場所に於いては、同じ理屈は通じない様だ。

例を挙げよう。「五角形」と聞けば、我々は図形を思い浮かべる。しかしそれを「ペンタゴン」と言えば、意味するものは全く違ってしまふ。幾何学の入り込んだ奇妙な物語が出来るかも知れない。まさにこのパラドックスが、「ミステリー」を解く鍵である。聖書の言葉が背景から切り離されて普遍化した、という事が理解されるならば、「ベッセル」などという用語はもう必要ないのである。

2 「宗派」の定義について。1で確認した様に、語義を厳密に定める事が、この研究にとって重要なのだが、以前から争論の対象である様々な名称について、著者による定義は明確ではない。「エッセネ派」「クムラン宗団」「ゼロテ党」……これらがそれぞれ、どの様な関係にあったかは、本書の主題ではないにしても、教会史の問題に直結している筈である。著者は何気なく「東方」「西方」という言葉を「ヘブライズム」「ヘレニズム」の意味で使っているが、キリスト教発生の基盤が、パレスチナ以外のユダヤ社会（ディアスポラ）にもあった事を指摘しているだけに、残念である。

3 新約の史料価値。著者に抛れば、新約聖書はかなり早い時期（37～60年代初期）に完成したらしい。だとすれば、その読者は非常に限定されよう。奇跡物語は、いわゆる

「キリストにある赤子」の宗教的ニーズに応えた結果である、というのが著者の見解だが、当時の一般大衆が、新約聖書を読んでいたという証拠は無いのだから、むしろこう考えるべきだろう。福音書記者達は、何よりも事実を正しく伝える事を重んじ、史料批判の余地も無い程にそれを高めた。つまり、一つの読み方しか許されない言葉で構成できる事件のみを纏めた、と。「もしいちいち書きつけるならば、世界もその書かれた文書を取めきれないであろうと思う（ヨハネ21ノ25）」と言われるイエスの生涯を書き残した、編集者としての彼らの視点を、スィーリングは明らかにしたのである。

これら3点から、評者は次の様に本書の試みを評価したい。まず、エッセネ派を地中海世界の広範な宗教運動として捉えた事。クムランを軸に展開したその運動は、特殊なスタイルの歴史記述を生み出した。それを、分かりやすい「ベシエル」という概念で説明し、謎解きに仕立てた事。この二つが本書の意義である。新旧両方の解釈を比較する時、我々はその余りの違いに、「言語は思想」とであると納得出来るだろう。

以上見てきた事項以外の問題点の指摘は4)専門家に委ねるとして、最後に読者として気になる点を挙げて置きたい。それは本書の『イエスのミステリー』という題名である。

高尾氏は何故、こんな軽薄な響きを選んだのだろうか。それに対する答えは、二つ考えられる。クムランでの秘教的な聖書解釈は、「秘密（ラージーム）」という用語に示されるが、「ラージーム」のギリシア語対応語は「ミステリー」(μυστηρια, ミステーリア)なのだ⁵⁾。「ミステリー」という言葉は、売れ筋を意図した訳ではなさそうである。

もう一つは、まさに本書が啓蒙書であるから、という理由である。今野國雄氏は、本書を「第1級の学術書」として紹介しているが、そういう読み方は危険である。著者の主張のうち、広く一般に認められている部分は殆ど無い。彼女の説が正しいかどうかは、全くこれからの検証に掛かっているのだ。とはいえ、本書は、聖書を文字通りに読む事しか知らなかった我々には、思考の転換を迫るものである。例えば、この時代（西暦1世紀）の誤りのない記録が存在する、という事実は、荒野の隠遁者達の行なっていた、暦に縛られる生活を想像しなければ、受入れ難いものである。しかし本書は、失われた小さな世界を再現する手掛かりを与えてくれる。

尚、『福音と世界』1994年10月号に、「『イエスのミステリー』を読む」と題して、土岐健治氏が小論を載せておられるので、興味のある方は参照して頂きたい。

註

- 1) BAR, March / April 1994, p.16.
- 2) BAR, September / October 1992, pp.69-70.
- 3) BAR, January / February 1993, pp.14-16.
- 4) 例えば「地震」の問題。著者は、クムランを襲った紀元前31年の「地震」の為、宗団が不浄になった場所を放棄したとしているが、遺跡に見られるのは人為的な火災の跡であるという事実と矛盾する。これは単に背景としてでは無く、ヘロデ大王

と宗団との政治的関係についての考察に大きな影響を与えるものとして理解されなければならない。M. ベイジェント他著、高尾利数訳、『死海文書の謎』柏書房、1992年、211-213頁。又、「シモン・ホ・ゼローテス」を「熱心党のシモン」と訳すべきかどうか、といった微妙な問題に関わる論争を、本書が吹き飛ばしてしまった事は、(良い意味でも悪い意味でも)注目に値する。

5) 日本聖書学研究所『死海文書』、41頁。